

第1章 調査概要

1 調査の概略

京都大学医学部附属病院西構内にあった元医学部眼科教室、のちの口腔外科教室3棟を取り壊し、その跡地に京都大学医療技術短期大学部校舎を2期にわけて建てる計画を、昭和51年に実施することになった。元眼科教室の建物は、明治43年建設で、正統的な古典系木造様式建築の代表作といわれ、工学部建築学教室建築史研究室が取り壊し前に建物調査を行なった[京都大学広報委員会77]。また、校舎予定地が白河北殿の北辺に当ることから、京都市文化観光局文化財保護課より工事に際して立合調査を行なうよう指導があった。さらに、同年8月建物調査を担当した川上貢工学部教授から崇徳院廟に関係する遺跡が発見される可能性があるとの指摘を受けた。そのため、周知の遺跡外ではあったが、建物解体後の8月13日、新営予定地に4ヶ所の試掘坑を設けて泉拓良文学部助手が調査を行なった。その結果、平安時代から室町時代に至る遺跡の存在が明らかになり、京都大学施設部と施工業者の浅沼組の協力を得て、発掘調査を実施することになったのである。

当時、京都大学北部構内で発掘調査を実施していた、京都大学農学部構内遺跡調査会(会長横尾義貫工学部教授)が調査を受託した。調査会は、調査にあたって川上貢工学部教授を班長とし、工学部建築学教室建築史研究員の大学院生と学生を主体とした京都大学病院内遺跡調査班を編成した。全面調査を行なう前に、第2期工事予定地についても試掘調査を行ない、遺跡がその地まで及んでいることを確認した。調査期間の制約と調査体制の不備から、第1期・第2期工事予定地すべてを1回で調査することは不可能と思われたため、昭和51年度では第1期工事予定地と、それに伴う共同溝予定地についてのみ発掘調査することとし、第2期工事予定地は昭和52年度に調査することとなった。

京都大学構内は、その当時すでに北部構内と教養部構内が周知の遺跡となっており、あらたに病院構内で遺跡が発見されたことから、吉田地区の全構内に遺跡が広がっている可能性が強いと考えた。そのため、京都大学全構内の遺跡調査を恒常的に行なう組織が必要となり、発掘調査を実施する組織として京都大学構内遺跡調査会、調査や保存について研究する組織として京都大学埋蔵文化財研究センターを設立し、昭和52年以後構内遺跡の調査と保存について積極的に取り組むことになった。したがって、第2次調査は新設された京都大学構内遺跡調査会(会長藤岡謙二郎教養部教授)が実施することになり、本報告書の

作成は京都大学埋蔵文化財研究センター(センター長樋口隆康文学部教授)が行なうことになったのである。

第1次調査

調査地点 京都市左京区聖護院川原町京都大学医療技術短期大学部校舎等新営予定地第1期工区(京都大学構内AE14・AE15・AF15区)

発掘期間 昭和51年8月20日～12月8日

発掘面積 約2,200m²

調査主体 京都大学農学部構内遺跡調査会

調査会長 横尾義貫(工学部教授)

調査顧問 村田治郎(名誉教授)

調査委員 山田晶(文学部長), 西村敏雄(医学部附属病院長), 中戸克二(農学部長), 林屋辰三郎(人文科学研究所長), 村地孝(医療技術短期大学部主事), 樋口隆康(文学部教授), 川上貢(工学部教授), 藤岡謙二郎(教養部教授), 石田志朗(理学部助教授), 泉拓良(文学部助手), 中山忠之(京都市文化観光局文化財保護課長)

監 事 西村利雄(施設部企画課長), 鹿野英夫(農学部事務長), 竹田保(医学部附属病院管理課長), 竹原正(医療技術短期大学部事務長)

調査班長 川上貢(工学部教授)

調査主任 谷直樹(大学院工学研究科博士課程3年), 岡田保良(大学院工学研究科博士課程2年)
(職名は当時のものを用い, 大学名は省略した。)

第1期工区は, 新営建物予定地と, その東端から北へのびる配管用共同溝の敷設予定地にわたり, 前者を中央で, $Y=1745.5$ の座標に沿う南北方向の畔によって二分し, 都合3地区に分けて発掘した(図版1)。試掘を終えた段階では, 表土と近世の耕土を機械力によって排除した後, 発掘調査を必要とする遺物包含層は, 調査区全域で単一とみなしていた。しかし, 調査区の西3分の1ほど($Y=1726$ 付近より西)は, 耕土下に包含層はなく, 東半部では, 当初予想した包含層の上面に別の1層が介していることが, 耕土を除去した時点で判明した。したがって, 調査過程における検出作業は, 部分的に3面にわたって行なうこととなった。

遺構平面図は, 最終遺構面と, それまでの個別遺構とについては割付けによって縮尺20分の1で, その他は平板測量によって50分の1で作成した(図版9～11, 図7)。主要な層位は, 西半部ではその南壁と東壁で, 東半部では南壁に近い旧建物基礎跡を利用したサブトレンチにおいて記録し, 北の共同溝地区ではその東壁の層位を記録した(図版6～8)。なお11月25日に現地説明会を行なった。

第2次調査

調査地点 京都市左京区聖護院川原町京都大学医療技術短期大学部校舍等新営 予定地 第2期工区(京都大学構内AF14区)

発掘期間 昭和52年6月15日～8月31日

発掘面積 約800m²

調査主体 京都大学構内遺跡調査会

調査会長 藤岡謙二郎(教養部教授)

調査委員 樋口隆康(文学部教授), 西川幸治(工学部教授), 足利健亮(教養部助教授), 西村進(教養部助教授), 泉拓良(埋蔵文化財研究センター助手), 太田増人(事務局庶務部長), 熊谷直家(医療技術短期大学部主事)

監 事 西村利雄(施設部企画課長), 竹原正(医療技術短期大学部事務長)

調査班長 岡田保良(埋蔵文化財研究センター助手)

調査主任 宇野隆夫(埋蔵文化財研究センター助手)

(職名は当時のものを用い、大学名は省略した。)

この調査区は、南辺が第1次調査区の西半部の北に接している。 $X=879.9$ (東西方向), $Y=1729.7$ (南北方向)それぞれの正方位線に沿って、十字形に層位観察用の畔を残し、4区画に分けて調査を行なった。高野川系の氾濫砂礫層が主要遺構のベースとなっているが、これと上層の近世耕土層との間の堆積はわずかで、かつ決して均一な包含層をなしていない。したがって、この調査における主要な層位を、第1次調査の層位との連続でとらえることはほとんどできなかった。一応、十字の畔の南面と西面の全部と、調査区の北壁と東壁の層位とを記録した。遺構のほとんどが井戸と溝であったため、調査区の全体を各遺構面ごとに縮尺50分の1で平板測量し、井戸の詳細を縮尺10分の1で割付け実測した。現地説明会は、8月10日に行なった。

なお本書作成にあたって、地点表示は構内座標にしたがい、AE14・AE15・AF14・AF15の各地区名を用いた(図版1)[京大埋文研78a]。ただし、これらの地区の区画は、調査当時の仮の構内座標系を用いたため、昭和54年度に正確な国土座標系に変換した後の地区割とは若干ずれることになった。本文や図版には、今後の調査にかかる遺構との相対関係の精確さを期して、すべて新たに変換した座標値を使用した。

2 遺跡の立地と歴史的環境

京都大学構内の中でも、医学部や病院構内において、平安時代から室町時代にかけての遺跡が高密度に広がっている事実は、いまや周知のこととなっている。しかし、そうした認識はごく最近のことであり、本書で報告する調査がその端緒となった。昭和51年夏のこと

とである。調査地点は、丸太町通りの北約150m、鴨川から東へ約300m隔たった病院西構内旧眼科教室の跡地であった(図1)。

白河北殿とその周辺 平安時代の末、鴨川の東には、白河天皇の法勝寺造営を契機として、本格的な市街化の波が訪れる。神楽岡(吉田山)の西麓は、吉田神社が10世紀ごろから鎮座していたとはいえ、鴨川、高野川、白川等の流路はそのころまだ安定しておらず、岡にほど近く、高野川の河原が広がっていた[藤岡78]。本調査地点あたりが、定住可能な土地となるには、当時かなりの土木事業が施されたことを想定しておく必要がある。文献資料のうえからは、直ちにこの地点と限定しうる歴史上の記載は見当たらない。しかし、福山敏男は、平安後期の六勝寺の位置について論考した中で、その時代の市街地形成がこのあたりに及んでいたことをはやくも示唆している[福山43]。また、その市街地の形態が平安京の条坊を鴨川を越えてそのまま東へ延長させた方格状であったという推定は、現在もなお、基本的な考え方として踏襲されている。その後、岡崎の京都会館建設に先立って推定六勝寺跡の調査が行なわれ、その報告に際して、杉山信三は、南は粟田口辺から北は神楽岡西麓の京都大学構内に至る広い範囲について、あらためてその条坊の街区の復原と、可能な限りの位置の点定を行なった[杉山・岡田61, 杉山62]。ただし、この街路と街区の配置に関してのみ、近年の六勝寺跡や京都大学構内遺跡の調査から得た知見に基づいて、筆者なりの修正を試みた(図2)[岡田79]。

調査区の敷地の南には、現在春日上通りと呼ぶ小路が東西に通じている。これは、ほぼ平安京の中御門大路を鴨川の東へ延長した道筋にあたる(図2)。六勝寺と同時代に創始された聖護院と熊野社は、境域の消長や一時の移転はあったにせよ、道とともに今日その位置をほぼ保っていると考えられ、当時のこのあたりの歴史的環境を復原するうえで、貴重な遺産となっている。

さて、上皇や女院たちが六勝寺をはじめ、盛んに造寺造仏活動に励んでここ白河の地に「京・白河」と並び称されるほどの都市的繁栄をもたらそうとすること、白河上皇がはじめて白河に御所と定めたのは「白河泉殿」であった。法勝寺の初代別当覚円僧正の房舎を造替したものらしく、その占地は南は二条末から北は大炊御門末に至る2町四方の敷地が有力とされる[杉山62]。この御所には蓮華藏院をはじめとする多くの堂塔が併存したが、そのために手狭となったのか、何か不都合であったのか、理由は定かでないが、大炊御門をはさんで北側に、元永1(1118)年に新たな御所が造営された。これが南の泉殿に対して「白河北殿」と呼ばれた院の御所である。ただその占地については、泉殿(南殿)ほどの史

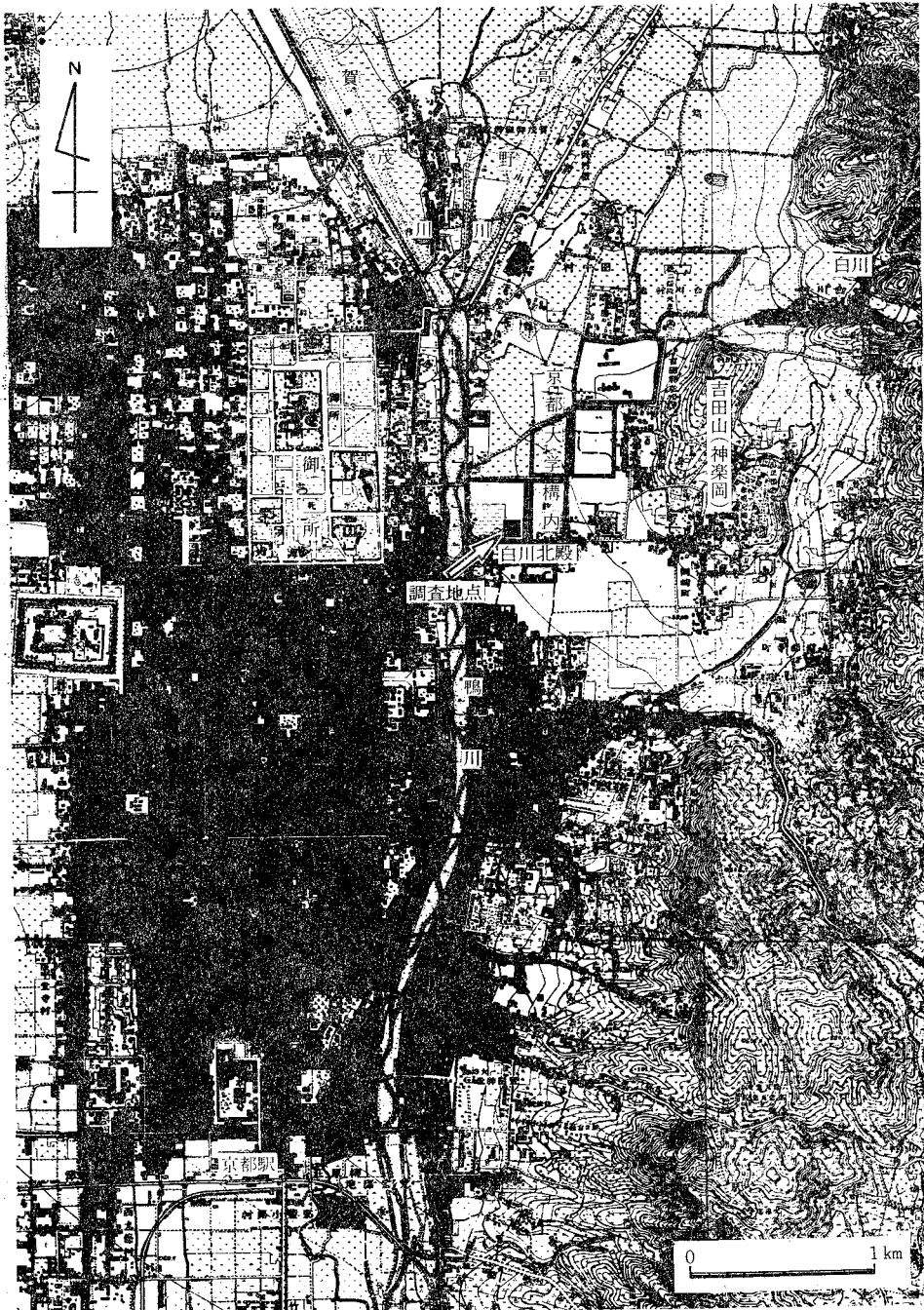


図1 調査地点の位置 縮尺 1/40,000
(明治25年仮製2万分1地形図から作製)

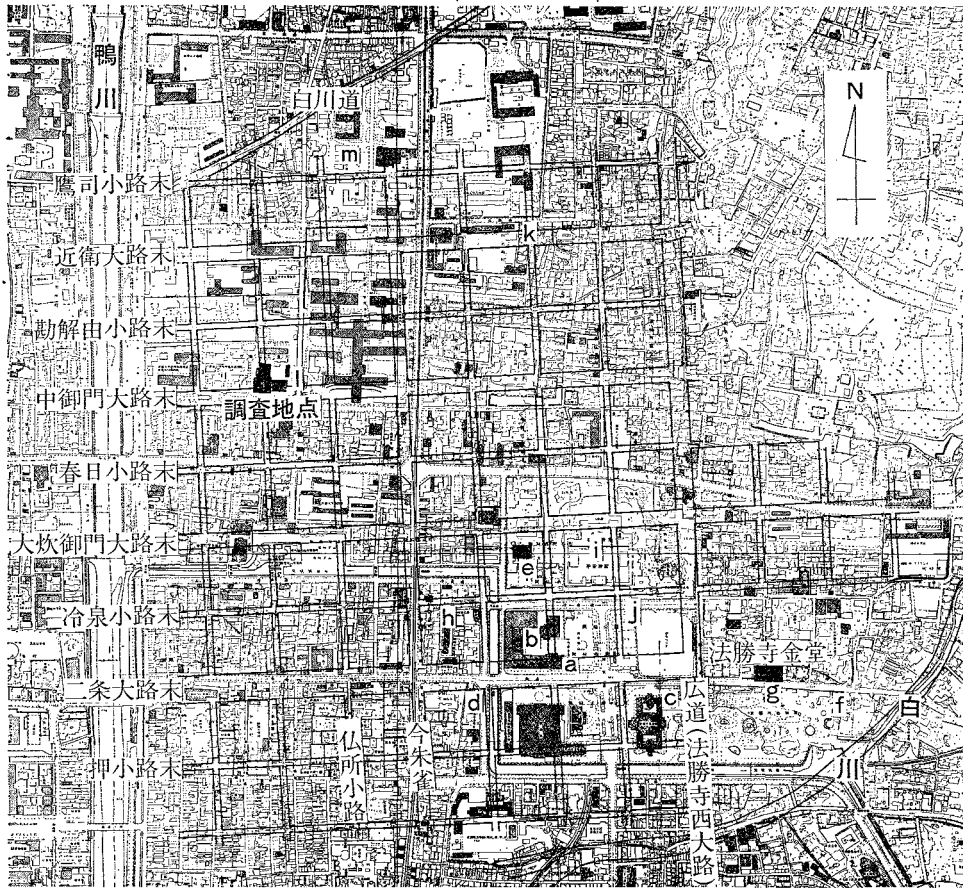
料がなく、北辺が春日の末までであったのか、大治4(1129)年の改造でさらに北へ中御門末まで及んだかどうかは明らかでない[川上77]。また東と西の辺についても、南殿とどういう関係にあったか定かではない。ただその位置について、『保元物語』に「白河殿(南殿)より北、河原より、春日の末にありければ」とあり、これに従えば「河原より」という語は、少なくとも北殿が南殿よりも河原に近く、ひと目に映る場所であったことを示しているように思われる。この北殿には、宝莊殿院と号する九躰阿弥陀堂が付属しており、長承1(1132)年に供養され、北殿よりさらに河原に近く、冷泉末と春日末のあいだを占めていたらしい[杉山62]。さらに長承3(1134)年、北殿の東側には「東御所」が造立され、康治1(1142)年には「東小御堂」が供養されている。北殿を含めて、これらの御所や御堂の占地が、中御門末よりも北へ及ぶことはないようである。

次に、それらより北については、先の東御所や小御堂を造進した、院近臣の民部卿藤原顕頼の宿所が北殿の北辺にあり、久安4(1148)年に他の家屋とともに焼亡するという記録があるほか、鳥羽院皇女の前斎院御所も北殿の北辺あたりと考えられている[川上77]。さらに近衛末の北側には高陽院泰子の福勝院が仁平1(1151)年に造立されるが、当時この地は熊野社境内であったことが指摘されている[杉山62]。

白河北殿焼亡以後 保元1(1156)年、白河北殿は崇徳上皇方がたてこもる所となり、一夜のうちに灰燼に帰してしまった。その後、平治1(1159)年、跡地には平清盛が千躰阿弥陀堂を造進しており、また、寿永2(1183)年には粟田宮が創始され、崇徳院の廟所とされた。これは応仁の乱で焼亡し、宮は四条通の南に再興される。明治ごろには、その旧地が京都大学医学部附属病院構内であったとも伝えられていたが、もはや確かなものではなくなっていた[西田30]。

保元の乱の後、白河と呼ばれた一帯の造営活動は衰退の一途を辿ったようではあるが、院の御所と異なって、社寺はその経営が直ちに途絶えることはなかった。特に神楽岡西麓から鴨川にかけては、もとの河原に帰することもなく、吉田社と熊野社のそれぞれの社領として再編されていったことがうかがえる。かつて近衛末の北側まで境内を有していた熊野社は、14世紀末には崇徳院と大吉祥院敷地を除く「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原」と四至が限られ[福山77]、同じころ吉田社の伸長は著しかったようで、『京都坊目誌』によれば、足利義満が近衛末より北、土御門末とのあいだは、河原から神楽岡に至るまで社領と定めており、熊野社と境内を接していたことになる。

京都大学構内の遺跡のうえから、室町後期以降このあたりは田畑化が進んだようで、そ



地点	遺構	規模・構造	方向・方位	比定物件	参考文献
a	建物基壇	東西16.5m, 南北12m	N2°50'20''W	尊勝寺南大門	杉山・岡田61
b	溝	石組, 幅0.8m, 側高0.3m, 検出長67.8m	南北 0°	尊勝寺	同
c	建物	柱跡, 方5間 (11.1m)	0°	円勝寺五大堂	円勝寺発掘調査団71
d	池	汀	—	延勝寺庭園	六勝寺研究会72
e	建物	桁行36m, 梁行25.2m, 5間4面総装階	N0°22'E	尊勝寺灌頂堂	工業・藤村73
f	池	汀	—	法勝寺庭園	木村・畑・上原75
g	建物	桁行51.2m, 梁行25.5m, 7間4面総装階	N0°12'W	法勝寺金堂	杉山・梶川75, 梶川77b
h	築垣	凝灰岩幅1m, 溝幅1.1m, 深さ0.3m	南北	得長寿院	梶川77a
i	溝と段	瓦石組溝	南北	尊勝寺	梶川・渡辺77
j	築垣	南溝・基壇・大行・北溝各幅0.8, 2.4, 3, 2.6m	東西N2°50'40''W	最勝寺北	同
k	溝	幅0.9m, 深さ0.2m, 検出長10m	東西N6°30'W	室町時代福勝院	京都府教委78
l	溝	幅1.0m, 深さ0.35m, 検出長56m	南北N2°50'W	法勝寺西大路より六町西	本報告書
m	溝と塙	溝幅3m, 塙幅3m, 検出長40m	東西N0°50'W	室町時代遺構	京大埋文研79

図2 白河街区と調査地点 縮尺 1/15,000

の画期はやはり応仁の大乱か、あるいはそれより少し遡るころに求められる。以後、幕末までその風景はほとんど変わらなかったとみなしうる。本調査地の西、鴨川までのあいだは、明治維新のときに府の操練場、明治5年には牧畜場となり、同20年には京都織物会社の設立をみる。この地が京都大学の土地となって病院眼科教室が開設されるのは明治43年のことである。この建物は、発掘調査を開始する昭和51年春まで存続した。